鷺流杭全家本『栗本実鑑集』二十について

――翻刻と紹介――

関屋俊彦

はじめに

昭和五十八年度に関西大学の国内研究員となったことを記念して、本文十六ページという実にささやかな自費出版を試みたことがある。『関西大学図書館所蔵「杭全家狂言伝書」について　付、関西大学図書館所蔵戦前能楽関係文献目録』（昭和五十九年一月十日発行）と題して何人かの方に配布した。「杭全家狂言伝書」とはすなわち鷺流狂言師杭全氏書写の仮綴じ狂言台本一八〇冊と相伝書一枚の一揃いを指す。拙稿を書いた当時は書写者である「杭全氏」とは一体誰なのかであることにひっかかってしまい、中途半端なものになることを恐れていた。その気持が自費出版という形に止めた方がよいと自己判断したものである。それ以来すっかり忘れてしまい、相変わらず中途半端なままになっていた。しかるに田口和夫氏が『能楽研究』第十五号（平成二年十二月二十日、法政大学能楽研究所発行）で「小杉本『別習鷺流狂言本』翻刻・解説」を著わされ、その中で拙稿と「杭全家狂言伝書」を紹介され「中には〈鬼比丘尼〉のような珍曲も含まれるが、それらの詞章はいずれ関屋氏によって紹介されると思うので」と催促された。事ここに至っては応じなければなるまい。「杭全家狂言伝書」の中でも特に『栗本実鑑集』は巻二十だけ書写されたものではあるが、他の伝書にも見当たらない「鬼比丘尼」を含むものなので、ここに翻刻し紹介しておきたい。なお、前掲拙稿をまとめた為に一部重なって報告することをお断わりする。

「杭全家狂言伝書」と杭全家について

「杭全家狂言伝書」は中尾松泉堂の御主人堅一郎氏のご紹介で関

西大学図書館に入ったものである。大阪のとある町長の家から出たものということで、氏の記憶でもそれ以上はわからないようである。関西大学図書館報『籍苑』第二号（一九七六年一〇月）に藤井収閲覧参考課課長が初めて簡単に紹介されたことで何人かの狂言研究者の知るところとなった。

伝書には次のようないきさつが書かれた原稿（「大阪古書月報原稿用紙」B5版二百字詰用紙四枚に任意記載）が入っている。

「……鷺仁右衛門定賢が大阪富豪の平野屋五兵衛事杭全初太郎仝祐五郎へ秘伝を相伝し皆伝を免許した秘伝書で、そのまゝ杭全家に伝(わ)ったものである。（中略）杭全家は代々大阪豪商綿問屋で現代十二代目を襲名……」

平野屋五兵衛は近世大阪の十人両替商のひとりで、幕末には没落してしまうが豪商であった。宮本又次氏のを始めとして経済関係の史料は多い。菩提寺は光徳寺で『日の本の教え』を書いた明治の高木半はその一族である。なお、前掲拙稿に目を留められた西野春雄氏（「近代前期の新作謡曲」中「叢雲」、『能楽研究』九号、昭和五十九年三月）により高木半の作品が明らかになったのは喜ばしいことであった。伝書には安永から文政にかけての年月日の記述が見られるので、その頃の平野屋ということになると、八代宗清と高木元隆（安永九年～嘉永五年）がいる。元隆は歌人熊谷直好の保護者でもあった。しかし、残念ながら平野屋と杭全を結びつけるものはこの原稿以外の傍証はなおない。

杭全姓の方を尋ねたり、杭全神社にも問い合わせてみたが、狂言とは関わりがなかった。たゞ杭全氏が狂言師のひとりであったことは『乱舞人物録』（寛政七年刊と文化三年刊とがある）に大阪の鷺流狂言方として「杭全初太郎」の名前が挙げられていることで知られている。恐らくはその頃の大阪の鷺流の中心人物であった植島円蔵を介して、杭全初太郎は鷺流十六世宗家の鷺仁右衛門定賢に入門したものであろう。

『栗本実鑑集』二十について

『栗本実鑑集』二十は「杭全家狂言伝書」に含まれるもの。縦二四・九センチ、横一七・四センチで全四十一丁の仮綴本。表紙に「栗本実鑑集　二十」とある。他の十九冊乃至それ以上の本はない。「若和布・万歳太郎・深草祭・月見座頭・鬼比丘尼・二人座頭・猪狸・祇園謡・松山鏡・ホウ〳〵頭・伊勢物語」の十一曲を収める。安永年間成立の『森藤左衛門狂言本』（法政大学能楽研究所蔵）に『栗本実鑑集』が引用されている。曲名だけ覚書とすると、第一冊に〔張蛸〕〔鼻取相撲〕、第二冊に〔氏結〕〔大般若〕が引用されている。『栗本実鑑集』〔以下、「栗本」と略称）そのものについ

ての言及はない。なお、前掲御論考で田口氏は「『別習鷺流狂言本』とは万歳太郎・伊勢物語の二曲が共通する（中略）この巻二十が「習雑」とされているところは、「別習」と共通していて面白い。その流儀に保持されていなかった曲を「習」として導入したと見られるからである」と示唆されている。そして、〔万歳太郎〕は「別習」（〔松囃子〕と題する）と比較して「『本文は栗本の方が簡略で、太郎が登場して道行をする所でも、「年取俵物」の事を云わないので、あとの展開がやや唐突に感じられる。』」と指摘される。〔伊勢物語〕については「栗本」文を逐次引用される。「セリフの細部には異なる所が多い」からである。

「鬼比丘尼」は諸流諸台本には見られない曲である。配役はシテ酒呑童子、ツレ鬼二人、アド尼（老女、狩人の母）、ツレ狩人。次に粗筋を小段で示す。

1、（狩人）名乗り〔都の狩人登場し、三年前、猟で深追いし、酒呑童子に出会い、助命の代わりに毎日獲物を取ることを約束したと語る。〕

2、（尼）名乗り〔三年前行方不明になった息子の狩人を捜すところだと述べる。〕

3、（母子）問答〔子は帰られぬ事情を母に告げる。母は鬼の面を被って鬼共をだまそうと提案する。〕

4、（シテ）名乗り〔酒呑童子、次第で供鬼二人を連れて登場。狩人を捕らえたことを述べる。〕

5、道行き〔峠に到着〕

6、着きセリフ〔シテ、供鬼に狩人を尋ねさせる。〕

7、（狩人・シテ）問答〔狩人、シテに獲物を捕らえる為の背子を要請する。〕

8、カケリ〔シテ、我が威勢のほどを謡いながら舞う。〕

9、問答〔尼よろよろ出る。狩人、母は宿願を立てゝ鬼となったので二人共に召し使って欲しいと願う。いったんは反対にもあうが、結局召し使うこととする。その際、鬼の禁物を口走ってしまう。〕

10、酒宴〔鬼共、酒宴を行なう。〕

11、追い込み〔真言を唱え、数珠を投げ、鬼共を追い込み、退場。〕

キリの「大江の山を、亦踏分けて都えとて社帰りけり」はそのまま能〔大江山〕の詞章取り（『謡曲叢書』によると、文末は「帰りけれ」）で、能のいわばモドキとなっている。いつ演じられたかの記録は未だ見当たらないが、いきなり「栗本」の段階で成立したとは思えない程構成はしっかりしたものとなっている。

他の曲について、田口氏論同様に池田広司氏『古狂言台本の発達に関しての書誌的研究』（昭和四十二年三月発行）付録「狂言曲目

所在一覧表」で、台本の有無を確認しておく。

	鷺流	大蔵流	和泉流	狂言記
若和布	保教	ナシ	天理以下	ナシ
万歳太郎	栗本	ナシ	波形・集成	ナシ
深草祭	集	ナシ	集成	続2
月見座頭	賢通以下	山本以下	三百	ナシ
二人座頭	保教	ナシ	集成	ナシ
猪狸	栗本	三百	ナシ	ナシ
祇園詣	栗本	三百	ナシ	ナシ
松山鏡	賢通以下	虎清以下	天理以下	ナシ
茫茫頭	保教以下	虎明以下	天理以下	続2
伊勢物語	五十・栗本	ナシ	ナシ	ナシ

表で見るように、〔猪狸〕〔祇園詣〕〔松山鏡〕は鷺流では初めて記される曲でもある。

〔猪狸〕は野々村戒三・安藤常次郎校注『狂言三百番集』（昭和十七年、冨山房）に収められるだけのものである。同書の元の表には和泉流としてあるが、実際は大蔵流八右衛門派の番外曲である。〔釣狐〕と構成は酷似する。「栗本」は短い記載ながら、アドが播磨の郡小笹の里の左近三郎と名乗り、猪狸のいわれを語っているところが大きく相違する。

〔祇園詣〕は〔猪狸〕と同じく、『三百番集』に収められるものだけであるが、これも実際は大蔵流八右衛門派の番外曲である。本文は『三百番集』とほとんど変わらない。

〔松山鏡〕の内容は明らかに〔鏡男〕である。表も〔鏡男〕の別名と解した。前掲の池田氏表では〔松山鏡〕は『天正狂言本』のみの存在としている。しかし、『天正狂言本』にしてもその内容は〔鏡男〕の古態を示すものである。「栗本」ではシテの名乗りに「越後の国松の山家に住居」とあるので、題の由来が判明したこととなる。

〔翻刻〕

凡例

底本を忠実に翻刻することを原則としたが、左の方針に従って校訂した。

一、本文の文字づかいは片仮名であるが、読みやすさの便宜を考え平仮名に直した。また旧漢字で通行の字体に直した場合が多い。

一、任意に読点をうった。

一、役柄を明確にするために（　）内に記した。送り仮名などが抜けていて読みにくい場合も（　）で補った。

一、行間の補筆や演出は〔　〕でくくった。

一、明らかに衍文である場合は省いた。

（表紙）栗本実鑑集　二十

（目次）栗本実鑑集巻第二拾

習雑

若和布　二人座頭　伊勢物語
万歳太郎　猪　狸
深草祭　祇園詣
月見座頭　松山鏡
鬼比丘尼　ホウ〳〵頭

若和布

（アド）「是は山居の坊主てこさる、先新発知を呼出し、申付る事か有る、新発知をちやるか、（シテ）「はあ、御前に、（アド）「其方を呼出すは余義ても無、此所は奥深き山家の事成れは、猿の声、或は鹿の声のみ聞て、物淋しう暮し、朝夕の楽みには茶より外の物は無、夫に付茶を立るには若和布か能物ちや程に、其方は大義乍、都え上て若和布を調て来さしませ、（シテ）「畏てこさる、（アド）「古ひねたはわるひ程に、すひ分若ひ色の能を調て来さしませ、（シテ）「心得ましてこさる、（アド）「早ふ御行きやれ、（シテ）「畏てこさる、扨々是は珍ひ物を調に遣はさるゝ事てこさる、爰元は奥き山家成れは、某は終に若(和)布と申物を見た事か無、此度調て見うと存れは、心嬉舗ひ事ちや、〔道行は末ひろ、太郎同前、都辺つひて〕若和布買ふ、若和布か求たうこさる、〔若和布うり、常の通り〕（売手）「中々売てをませう、（シテ）「去乍古ひねたはいやてこさる、すひ分若ひ色の能を売て下され、（売手）「成程心得てをりやる、去乍少と隙か入ふ程に、しはらく待て御くりやろうか、（シテ）「何か扨、少と隙の入分は苦舗ふこさらぬ、（売手）「夫ならはしはらく待しませ、（シテ）「心得てこさる、〔太こさへ行て、下にいる〕（売手）「何も知らぬ田舎者と見えてこさる程に、何にても若和布ちやと申て売付、代物を取らと存る、去乍むさと致たる物は売付られまひか、何そ若和布しやと申事の義理の立物か有さうな物ちやか、何か能からうそ、えひ思ひ出ひた、某娘を数多持てこさる、中にも乙娘を若和布ちやと名付て遣はすれは、さつと済事ちや、先是えつれて参ふ、〔乙をつれには入る、乙出、はしかゝりにいる〕何んても是は能仕合ちや、代物も大分に申掛て思存分に取ふと存れは、心嬉ひ事てこさる、やひ〳〵乙よ、能仕合な事か有そ、先是えこひ、汝は果報な者ちや、大分のあたひを取て、去方え遣る程に、何時にても居とも無と思はゝ首尾合を見合て、すかせひよ、是に居よ、〔大小のまえにをくに〕最前の田舎人居さしますか、（シテ）「是に居ます、（売手）「待遠てをりやらう、（シテ）「いや、さうもこさらぬ、（売手）「扨若和布を売てきませう、夫(是てカ)迚ふこさる、（シテ）「やあ〳〵若和布は人てこさるか、（売手）「中々是てをりや

る、（シテ）「人を若和布と申には子細かこさるか、（売手）「子細迄も無ひ、其方は手跡か成か、（シテ）「手跡とは物書と申事てこさるか、（売手）「中々、（シテ）「書と申程の事はこさらぬか、いろはの文字は覚て居まする、（売手）「夫成れはさつと済んた、其いろはの内に、あさきゆめみしのめの字は女とよまする、若和布とは若ひ女と書て若和布と申よ、（シテ）「はあ、某は何んそ紙にも包んて持て帰る物かと存た、（売手）「御存(じ)無は尤ちや、若和布と云は此事てをちやる、（シテ）「今思ひ付てこさる、在所て云付られたも、茶を立るに若和布か能物ちやとも申てこさるか、扨は此若和布に茶を立させうとの事て哉こさらう、（売手）「成程其通りてをりやらう、（シテ）「今合点か参た、然らは求めませうか、代物は何程てこさるそ、（売手）「代物は万疋てをちやる、（シテ）「夫は高直にこさるか、まけは成ませぬか、（売手）「いかな〳〵まくる事は成らぬか、（シテ）「扨は成ませぬか、（売手）「中々、（シテ）「はあ、万疋に成とも求めませうか、夫程の用意を致さなんてこさるか、何と致ふそ、（売手）「何とをしやる、万疋ても求たひか夫程の用意か無とをしやるか、（シテ）「中々、（売手）「是は尤ちや、夫成らは代物は其方の在所て、此若和布に御渡しやれは済事ちや、（シテ）「是は何んとをちやらうそ、夫は近比忝ふこさる、成程代物は在所て渡しませう程に、若和布ををこして下されうか、（売手）「中々、さゝめされ、（シテ）「然らは若和布をつれて参ふ、（売手）「いかにもつれて行しませ、（シテ）「最早参る、（売手）「御行やるか、二人「去らは〳〵、（売手）「能をちやつた、（シテ）「はあ、扨も〳〵嬉しや、先は調てこさる、いさ先え行しませ、某か跡から案内を致ふ、誠に都人と申て、代りも在所迄其方ををこさしますか、扨々心の広ひ事ちやのう、是に付ても都は目恥かしひと申か誠ちや、其体の者を卒辞に有まひと見立られ、名石流な人ちや、いや、何角と云内に是ちや程に、夫にしはらく待しませ、御住寺様こさるか〳〵、（アド）「えひ、新発意、戻つたか〳〵、（シテ）「唯今帰りましてこさる、（アド）「やれ〳〵ほね折て有ふ、扨、若和布を求めてわせたか、（シテ）「中々求めて参てこさる、（アド）「とれ〳〵を見みやれ、（シテ）「表にをきましてこさる、（アド）「何んちや、表に有るう、（シテ）「中々、（アド）「扨は馬に負せてわたせと見えた、其様に略舗は入らぬ物ちやに、（シテ）「いや、申、馬に乗らす、あるひてわせましてこさる、（アド）「亦卒はうを云はしますよ、先早ふ御見しやれ、（シテ）「畏てこさる、さあ〳〵あれえ御出やれ、御目に掛まする、いや、是にたてこさる、若和布てこさる、アト「しゝ、〔と云て、新ほちをしかる〕是は何方より御出成れてこさる、（乙）「都からわせました若和布てこさる、アト「しゝ、扨々そさうなやつめの、御客の

有に先待てひ、（シテ）「のう、御客は若和布てこさる、（アド）「しゝ亦こえ出てはさうを云か、（シテ）「はて扨、若和布てこさる、（アド）「是はにか〳〵しひやつの、己は先爰えこひ、〔引立て、はしかゝりえゆく〕（アド）「後に云ても能ひに、客の有るに指合ひて、何事を云そ、（シテ）「いや、申、あれか若和布てこさる、（アド）「何んちや、あれか若和布ちやあ、（シテ）「中々、（アド）「夫は亦とう仕た事てさう云そ、（シテ）「都の者か申は、若和布とは若ひ女と書く、是か則、茶を立る若和布ちや程に、売ふと申たに依、求めて参てこさる、（アド）「扨は汝は都の者にぬかれて来たな、（シテ）「御本尊はぬかれは致さぬ、（アド）「先聞け、若和布と云物は海より生る藻草の事ちや、あの人を買て来ると云事か有物か、扨々方々舗ひ事哉、（シテ）「扨は人の事てはこさらぬか、（アド）「をんても無事、（シテ）「扨はまんまとたまさる、扨々無念至極な事哉、何と致した物て有ふそ、いや、思ひ付てこさる、御相談申事かこさる、（アド）「相談とは何事ちや、（シテ）「あの者か若男ちやも存ねは、あの被をぬかせて、女成らは助ていなせませうそ、若男なれは、ぬかれた迚も、余のぬかれやうてこさる程に、在所の衆を頼みまし(て)、ちようちやく致ませう、（アド）「いかさまにくひ事なれは、さうも能からうか、先たましてあの被を御ぬかしやれ、（シテ）「心得ましてこさる、御住持様にも御出成されませ、（アド）「心えた、（シテ）「のう〳〵、草伏ても有ふに、其被を脱しませ、〔かふりふる〕はて、苦舗う無事ちや、御脱きやれ、〔かふりふる〕平にぬかしませ、二人「さあ〳〵脱しませ〳〵、〔かつきとる〕（乙）「のうはつかしやの〳〵、御住持様に御茶を立て上けませう、のう、（アド）「いや〳〵、免ひて呉れひ〳〵、〔住寺は先えは入る〕（乙）「のう〳〵、御新発知殿、都て御約束致た代物を御渡し成れよ、（シテ）「夫は先、御住持と談合仕てからの事ちやて、乙「いや〳〵今更ら、ねは成のらぬよ、（シテ）「先談合してからの事よ、（乙）「いや、のう〳〵、とこえにけさしますそひ、（シテ）「まつひらゆるひて呉さしませ、（乙）「のう〳〵、其御新発意を取らえて呉さしませ、やるまひそ〳〵、

万歳太郎

アト弟「是(は)此辺りに住居する者てこさる、毎も万歳太郎か参時分てこさるか、今年は今に参らぬ、爰に誰と申て某の兄かこさるか、毎も兄き方から先え参るか、当年も定て兄き方えは参たてこさらう、先あれえ参て様子を承と存る、亦兄き方え参るまひ筈はこさらぬか、則是ちや、物まう〳〵、〔如例〕（兄）「いや、何と思ふて見廻しましたそ、（弟）「去れは毎も万歳太郎か参る時分てこさるか、私方えはまた参ませぬか、爰えは参ましたか、（兄）「中々、

手前えもまた見えぬ、定て今日はこうと思程に、是に待合ひて合やれ、（弟）「成程是に待ち合ませう、（兄）「先是にをちやれ、（弟）「心得ました、〔兄弟とも笛の上にいる〕（シテ）「罷出たる者は万歳太郎と申て洛外に隠れも無者てこさる、毎も旦那廻りは三ケ日の内に致せとも、当年は何角と致て、今日出る事てこさる、扨、となたから参ふそ、いや、誰殿か近ひ、是から参ふ、誠に去年参つたを、昨日今日と存てこさるか、早一年せ立てこさる、いや、何角と云内に是ちや、物まう、案内まう、〔如例〕先以御殿めてたう存ます、（兄）「扨、毎もよりをそさに待兼たか、何と仕てをそかつたそ、（シテ）「去れは申、私の囃子か吉てうちやとこさつて、近国遠国から尋て参られまするに依、一円に隙を得ませひて、毎も三ケ日の内に旦那廻りを仕舞まするに、当年は唯今出かけてこさりまする、（兄）「夫は先段々繁昌て、めてたうをちやる、誰れも其方か余りをそひと云て、是え来て待ていらるゝは、（シテ）「やあ〳〵、是え御出成れて待てこさりまする、（弟）「のう〳〵太郎か、（兄）「今来てをりやる、合しませ、（シテ）「心得ました、はあ、是りや是にこさ(り)まする、先以御殿御めてたう存ます、兄「扨、毎(も)の如くに、めてたう拍子ひてをくりやれ、（シテ）「追付拍子ませう、〔ヒラキ〕（シテ）「扨、毎も去年の暮には俵物を呉らるゝか、今迄失れられたか、思事か合ても、其事はけんよも無顔仕て居らるゝ、はて気毒な事ちや、去年一年杯は呉られひても苦舗う無か、此様な事は例に成たかる物ちや、何卒気の付様に拍子たひ物ちやか、いや、致様か有、扨、追付て拍子ませう、（兄）「早ふ拍子てを呉やれ、〔謡調〕其方の門はいさ知らす、此方の門もいさ知らす、半端計栄えた、御めてたうこさらり(ま)する、（兄）「何と今の拍子は毎のとは違ふたてはこさらぬか、ヲ(トウト)「中々、私も左様に存ました、是は御不審成れて能こさらう、ア(ニ)「のう太郎、シテ「はあ、ア「扨、今の拍子は毎のとは違ふた程に、めてたう毎の様に拍子直ひて御呉れやれ、（シテ）「夫は此方様の御失念てこさ(り)ませう、拍子は毎年同事てこさりまする、（兄）「いや〳〵失念はせぬ、当年の拍子は違てをちやる、（シテ）「いや申、左様に堅く物を仰られぬ物てこさる、必々失れまひと思ても、得ては失念と申事か有たかる物てこさ(り)まする、先号、去年の正月から十二月めか、別しては号年取時分を能思ひ出て御覧ちませうす、何ふ御失念か無ては叶ませぬに、はて、是は違ませぬ、（兄）「いや〳〵身共は物覚の能者て、拍子の正がは覚ているか、とうても違ふたわひの、（シテ）「はて扨、是程に申に、御気か付かぬさうな、拍子物は二段、彼年取俵〔口に手をあて〕もう御暇申ませう、（兄）「先御待やれ、某は失念仕た事かをちやるわひの、（シテ）「何事てこさりまする、（兄）「毎も其方の方え年取取物を遣わすか、去年は何と

取込んてか失念を仕た、追付持してをませうそ、（シテ）「いや、申、毎年〳〵下されまする物を、去年一年下されぬと有て、何と存ませう、是は最う御しんしやく申ませう、（兄）「いや〳〵毎年遣わす物を、当年計遣らぬも気に掛る、追付持して遣はさうを、（シテ）「てこさりまするか、忝(ふ)社こさりますれ、其義成らは、追付めてたう拍子直しませう、あなたの門は栄えた、此方の門はいさ知らす、我も亦知らぬ成や、さうよの、御めてたう存ます、ア(二)「其方からは去冬、年取物を御遣りやつたか、(弟)「誠に失念を致ました程に、理りを申ませう、ヲ「のう、太郎、（シテ）「や、（弟）「身共も追付、半右持せて遣ふ程に、めてたう拍子ひてを呉れやれ、（シテ）「半石杯は入ませぬいの、最ふ御暇申ます、（弟）「是々其義ならは、石一つをませう、（シテ）「夫は何かこさらうそ、去らは迎の事、方つこうを打て、弥末繁昌とめてたう舞納めませう、（弟）「急ひて舞て御呉りやれ、（シテ）「心得ました、〔大小の前にて掛素袍の肩上け、かつこ付て、かつこ常の如く也、向ふえ走り、こくをするをせす走、左右、止〕荒々めてたや〳〵な、弓は袋、剣は箱に納りて、武運長久、国土豊に納る御代社めてたけれ、

一、シテ　十文字掛素袍、くりはかま、

一、アト両人共　長はかま、道具　かつこ、ばち、

亦一名松囃子共云、

深草祭

罷出たる者は洛中に隠れも無いたつら者てこさる、今日は五月五日成れは、加茂の桂馬、亦深草祭てこさる程に、見物致ふと存て罷出た、独参るもいかゝてこさる程に、爰に某の兄弟同前に語る仁かこさる、是をさそをゝと存る、宿に居らるれは能こさるか、則是ちや、何と御亭主は内に居らるゝか、やゝ何ちや、深草え見物に出られた、いや、早とこもぬからぬは、是非に及ぬ、独参ふ、いや、向から来る人か笠をぬくは、いや〳〵やはり着さしませ、扨身共は深草え見物に行か、御行やるまひか、何んちや、行たひか刀か無ひ、無くは大事か、はて身共(も)丸腰ちや、して、とをてもをちやるまひか、はて、是非かなひ、さう有らは其内御目に掛らう、さらは〳〵、いやのう、是々そこなわら打人、深草の御神は何時ちや、何んちや、已(に)午の刻ちや、一刻も二刻も早ひ、さらは此内に内々聞及た裡に、九条堀川の御所を見物致ふ、〔道行〕御所を見物して、夫から深草え往たらは、能ひ時分て有ふ、いや、何角と云内に是ちや、扨々承及たよりも夥舗境内ちやは、先御馬屋を見物致ふか、亦御主殿を見物致ふ、とは云え御主殿かとこやら知らぬか、是ちや、何程有の、一間ん、二間ん、七間んちや、此方か五間の御馬家ちや、是は年を表(に)仕て、十二因縁の心を立られたは、扨とれも〳〵見事な御馬ちや、分て是成尾髪のちゝしたる御馬か名馬そうな、亦此方成

は四つ白の御馬か、天晴な名馬そうな、扨御主殿は左え行とやら聞たか、先号行ふ、行当らすは戻る迄よ、是ちや、先は聞及たよりはきれひな事ちやは、爰元の柱は皆蒔絵ちや、はあ、天井もこう天井ちや、見事な絵さうな舗かれた、畳は高麗縁を詰舗に舗かれた、扨もけつこうな事哉、迚の事て此障子を明の、しかりはせまひかの、若しかつたらは理りを云ふ迄よ、さら〳〵〳〵、はあ、仙水か有は、是は扨も〳〵夥舗ひ鳥哉、鮎迄、川かこれは、扨此石の数は法花経の文字の数程有と云、法花経の文字の数は六万九千三百八十四文字有と云か、此石の数も夫程有ふかひ、扨向ふに立石、寄せ石、流れ石、てひはん石に来向石、すひ分ふせきて、能ふわせかれた、いや、迚の事に持仏堂を見物致ふ、是から町か有、号往て見よう、去れは社是ちや、尊うとひ寺は門から見ゆると云か、定ちや、是も光りかゝやひて、まつ唯三面四面に光れは、誠の極楽と云も此事て有ふ、御本尊は此沙門、愛染名御、いらかを並へて掛られた、先拝ふ、荒有難や、是には京の押画か有、少休んて此画を見物致ふ、是は遠帆の帰帆か、平町の落雁、雁の勢か見事ちや、しやう〳〵の夜の雨、是は画ては無て、まつた雨の降如くちや、やあ〳〵何と云ふ、早御神事か始まる、馬、太刀、具足も渡るか、さ有らはれ急て参ふ、渡る筈ちや、日かたけた物を、何角と云内に是ちやは、はあ、馬、太刀、具足か渡るは、此具足はとなたのてこさる、楚久天本様の具足ちや、是爰な人、押すまひ〳〵、有か痛ひわひのう、あれ、あれえ見ゆるか卯の花をどし、是は小桜をとし、跡に見ゆるか緋をとし、天時何れも見事な具足ちや、是々先の人、笠を脱しませ、跡か見えぬ、やあ〳〵やふさめか始まる、是も見物致ふ、誠に馬に乗るは〳〵、此馬はとなたのそ、中納言様の御馬ちや、乗ては誰れちや、室町通のまきひの弥五九郎しや、強ひそ〳〵、是はとなたの御馬そ、知らぬう、乗ては烏丸通の宮の九郎三郎、乗た〳〵、此乗手は何んちや、柿の木原の洸次郎しや、誠にさうちやさうな、食しはつて乗たは〳〵、あゝあふ無ひそ〳〵、亦々々、押まひそ〳〵、やあ、そこえ走るは何事ちや、角力初つたと云か、とれ〳〵夫は面白かろう、扨もいかひ人ちや、是には見られまひ、其元下にとされ、跡か見えぬそ、扨も強さうな者か出たそ、行司御侍てやれ、むさと仕た合せ様ちや、先相撲と云物は務む心は春駒の立はなるゝ心内仕して、四十八手の取手有り、夫をくたき細かに取れは八百様にも取、左様の相撲の合せ様ては有まひ、いや、是はたからかにはしやんな、身共か号云か曲事に成らは、其方衆には掛けぬ、身共か合手に成所、全訳を知らぬ物と合手に成ても入らぬ物ちや、見るかつらひ、帰ふ、去れは社あれに人立か有る、何事ちや〳〵、印地か有る、是は面白ろかろ、とれ〳〵爰元か見物庭に能さそうな、先是て見ませう、さあ〳〵向ひに色めくか、此方にもすゝんて出たそ、をゝ強さうな〳〵、柿の

鉢巻か、強は物ちや、去れは社向から押て来るは〳〵、見物の衆、爰を少も引せらる、ちやあ、味方か負けさうな、掛れ〳〵、えひとな〳〵〳〵々々、〔笑〕をゝ今日の手柄は身共ちや、亦明年も参ろ、さらは〳〵、

此狂言独仕事　狂言はかま、すけ笠持て、十徳能力か姿にてもする、

月見座頭

（シテ）「是は下京に住居致す勾当てこさる、今宵は月見ちやと有て、何れも寄合て慰せらるゝ、某は盲の事成れは、月を見て慰ふ用もこさらぬ、兎角某如きの者は野辺んえ出て、虫の音を聞が何より慰てこさる程に、野辺にえ参ふと存る、誠に眼の能衆は月を見ては歌を詠、亦は詩を作り、色々の慰を仕て遊せらるゝ事ちや、定て面白ひ事てこさらう、いや、早里放れか仕て、眼には見えぬ共、心かわつさりと仕た、扨、とこ元え行ふそ、いや、あれに虫の鳴音かする、あれえ参つて聞ふ、はあ、鳴は〳〵、松虫か鈴虫か、なんちやさわか舗ひ鳴用かするか、あれはくつわの虫て哉有ふ、はあ、くつわ虫ちや〳〵、違も無、あれはくつわ虫ちや、夫々能ひ名を付けた物ちや、いや、あれに人声かする、申々、此方はとれから御出成されてこさりまする、何と五条辺りちやと仰らるゝか、定て月見に哉御出成れた物てこさらう、是は能御慰てまさまする、や、亦こちらにも人声かする、はあ、旁は酒宴を仕て遊せらるゝ、浦山舗ひ事哉、是々々々、旁はいかに面白ひと云て、其用にかしましう云て謡せられては、月を見させらるゝ義は樗は致まひか、虫の音を聞にはやれ都てに成増るゝや、樗ふなと云はせらるゝか、能こさる、はて樗はぬ事成らは、某も謡ませう、〔さしをいで、わるく大きにうたう〕やあ〳〵歌を謡にかまう、此方かいやならは人も嫌うと思わせられたか能こさる、いや、こまられたか、仕てぐつとも返事か無ひは、あゝ亦鳴出ひた、扨も〳〵面白ひ事哉、（アド）「是は上京に住居致者てこさる、今宵は月を見て慰ふと存てこさる、いや、是に座頭か居る、あれは眼も見えぬかに、月を見る事か知らぬ、某も少あれはえ参て、慰ふ、のう〳〵其方は洛中の人か洛外の人か、（シテ）「やゝ某は下京の者てこさるか、此方はとれから御出成れてこさる、（アド）「身共は上京の者てをりやる、（シテ）「上京と仰らるれは心恥かしうこさりまする、（アド）「扨、此方は今宵何を仕て慰せらるゝ、（シテ）「某は盲の事てこされは、月は見られす、虫の音を聞て慰事てこさる、（アド）「誠に夫は尤な事ちや、扨、其方は歌ても詠しますか、（シテ）「いや、もう身共は歌と申物は詠た事はこさりませぬ、こなたには上京ちやと仰らる程に、嗤遊すてこさらう、（アド）「少計いたすよ、（シテ）「今宵は名月てもこさり、定て御詠

なされぬてこさらうか、承りとうこさる、（アド）「号も有ふかの、（シテ）「早遊されたか、（アド）「歌の一首二首はつひ詠ふてをりやる、（シテ）「夫は扨、御達者な事哉、さあ〳〵承ませうか、（アド）「秋風にたな引雲のたえ間より〔きんする〕もれ出る月の影のさやけさ、（シテ）「扨も〳〵面白ひ事てこさ(り)増、（アド）「何と能をりやるかの、（シテ）「いや扨、此用な珍ら舗ひ歌は今か聞始めてこさり増、（アド）「歌に珍ら舗ひ歌とは、（シテ）「はて、今日聞始めちやと申事てこさる、（アド）「扨、其方も何んそ一首御詠みやれ、（シテ）「上京の御方の御前て歌を詠、余(り)恥か舗ひ事てこされ共、詠ても見ませうか、（アド）「さあ〳〵御よみやれ、（シテ）「号もこさらうか、（アド）「何とてをりやる、（シテ）「月見れは千〻に物社かなしけれ、〔きんする〕我身一つの秋にはあれねと、（アド）「是は古歌ちや、（シテ）「いや、此方のも古歌てこさる、〔シテ、アト笑〕アト「のう〳〵小筒を持た程に、一つ呑しませ、（シテ）「夫は能こさらう、（アド）「さあ〳〵御呑みやれ、（シテ）「先参りませひ、（アド）「然らは呑て指ませう、さあ〳〵呑しませ、（シテ）「然らは下されませう、あゝ申こさり増〳〵、是は能御酒てこさります、（アド）「上京は酒か能をりやる、（シテ）「扨、此方え上げませう、（アド）「押へう程に、ま一つ御呑みやれ、（シテ）「夫ならは、ま一つ下されませう、あゝ申、こさり増る〳〵、一つ受持てこさる程に、何んそ肴を成れて下されうならは忝こさらう、（アド）「成程(うたひ)ませう、〔小うたひあり〕（シテ）「上京と仰らるれは、御謡返かようこさる、扨、是を此方え上けませう、（アド）「中々、某かいたゝかうか、（シテ）「一つ上りませひ、（アド）「いかにも一つ呑ふ程に、其方も何にか肴を仕て呉さしませ、〔平家にても、小歌にても〕（アド）「扨も〳〵面白ひ事哉、迎の事に何卒其方の立姿か見とうをりやる、（シテ）「座頭に立姿とは珍ら舗ひ御好みてこさる、（アド）「珍ら舗ひに依、好ふてをりやる、（シテ）「然らは一つ舞ませう、（アド）「舞は猶よからう、（シテ）「申、地を付て下さりませ、（アド）「心えてをりやる、〔シテ、せみ丸を舞〕やひや〳〵、扨、是を其方えさしませう、ま一つ、さしませうか、さあ呑しませ、（シテ）「申、まさり増る〳〵、「私も一つ受持てこさるて、此方の御立姿も望にこさる、（アド）「尤舞もせうか、座頭の舞を所望するは、是も珍ら舗ひ事てをりやるの、（シテ）「珍ら舗ひに依、望事てこさる、（アド）「夫ならは舞もせうそ、（シテ）「さあ〳〵舞せられませう、（アド）「其方地を付て呉さしませ、〔山うはを舞、山廻りの所、下に居て、まねを仕て、さとうのかほをなてる〕（シテ）「やひや〳〵、面白ふ思われます、（アド）「いや、もう某は御暇申ませう、（シテ）「もう御帰成れ増か、（アド）「迎も上京と下京は連れ

にも成ますまひ、(シテ)「其通りてをりやる、(二人)「去らは〳〵、(シテ)「はあ、扨も〳〵態慰を仕た事哉、〔シテ、アト一所〕(アト)「やれ〳〵面白ひ事哉、いや、座頭をなふつて帰ふ、〔アト行あたる〕シテ「是は何者ちや、此眼も見えぬ物に行当ると云事か有物か、(アド)「いや、汝か行あたつた、〔声をかえて云てひ也〕シテ「扨はわこりよは酒哉酔た者て有ふ、(アド)「酒に酔たとは、己はにくひやつの、帰す事ては無そ、(シテ)「帰ふか戻ふか我宿えいぬる事を、わこりよか樹ふは無ひ、(アド)「己また其用な事を云か、仕用か有、〔爰にて、くるり〳〵と四五へん廻す〕アト「扨も〳〵をか舗ひ事哉、是ては東西も知れまひ、いぬる事は成まひそ、〔笑入に〕(シテ)「是はいかな事、扨もむこひめに合せをつた、西も東も知れぬ用に成た、何と仕た物て有ふそ、誰そあらは尋たひ物ちやか、のう〳〵申、下京はとちてこさるの、はあ、皆御帰りやつたさうな、いや、あれに水の流るゝ音か致す、あれえ参、水の流れさえ知れたらは、我宿迄も知れる事ちや、先此枝を流ひて見よ、はあゝ、こちえ流るゝ、先是か下京さうな、さらは帰ふ、やあ〳〵人かみ犬ちやと云て、走ひてさわく音かするか、はて気味の悪ひ事ちや、ひやう〳〵、やあ〳〵是え来たさうな、ひよう〳〵、のうかなしや〳〵、あちえ行け〳〵、のうかなしや〳〵、誰れも無か、人かみ犬ちや〳〵、亦謡仕廻にも、皆人はさそひつれ立て帰らせらるゝか、我等は唯独ちや、あら連も無や、我独なれにし枝をちからにて、我やをさして帰りけり〳〵、

鬼比丘尼

猟人「是は都方に住居致(す)猟人てこさる、三年以前に猪を長追致(し)此所を酒呑童子の住家とも存せす参てこさるか、勿鬼ともか寄合、『我食ん、人食らわん、とつてふくせう』と申(す)程に、漸あつかひ、『我等か命の変りに毎日獄を取て進ふ』と申て、命を助(かり)てこさる、加様に奉公を致す、扨今日は童子、此所え慰に出て、狩を見物せうとこさる程に、峠え参て、何そ大きな物を取て褒美に願(は)ふと申(さふと)存(ず)る、誠に事のたとえにも、地獄も住家と申(す)か、誠てこさる、始めの裡は奇(しき)程当る程の者か恐ろ舗ふこさつたか、此程は鬼ともに名染みか出来て、中々面白ふこさる、やあ、何やら人の様な者か見ゆるか、此所え人間の来る所ては無(ひ)か、先此所に居て正体を見ようと存る、(尼)「罷出たる者は都方の者てこさる、童か子に誰と申(し)て猟人かこさるか、三年前に山え参て今に帰りませぬ、故(に)余り恋しさに奥深く尋来てこさる、先此所は人論たえた恐ろ舗ひ所てこさるか、何と申(す)所か知らぬ、(狩人)「やあ〳〵其許え出たる者は此仁倫たえた所

え何者成れは出た、定て狐か狸かて有ふ、今朝から待て居た程に今に思ひ知らせうそ、〔と云、弓矢をつかう〕（尼）「のう〳〵是はなつかしや、左右云は我子の誰ては無(ひ)か、（狩人）「扨是は母者分、何と仕て此所えはこさつた、（尼）「去れは、わこりよを失ふてから余りかなしうなつかしさに、立ても居ても居られす、山中を尋廻り、今日爰て合と云は神仏の引合てこさらう、扨先爰は何んと云所そ、（狩人）「去れはてこさるの、此所は大江山と云て、酒呑童子の住家てこさる、（尼）「のう恐しやの〳〵、夫は鬼てはをりらぬかひの、（狩人）「中々鬼てこさる、（尼）「やれ〳〵爰な者か、此様な所に居ると云事か有物か、早ふ戻りやれ、（狩人）「いぬる事は成ませぬ、（尼）「夫は何と仕て、（狩人）「去れはてこさる、三年先に猪のしゝを長追仕て、此所え来ましたは、鬼ともか寄合、『我食ふ、人食わん』と申て、すてに命を取らるゝ筈なれとも、色々詫言を仕て、命の変りに毎日鹿猿を取て進ふと申て、命を助ていまする、殊に今日は是え童子か追付来まする、此方を見たらは定て一口にふくせう程に、早ふ帰らせられひ、（尼）「いや〳〵其方を留て、をれ計いぬる事は成らぬ、（狩人）「はて扨無分別な事を云はせらるゝ、兎角云内に隙か入程に早ふいんて下されひ、（尼）「いゝ(や)たとえ食はるゝ迚も、其方のそははなれぬ、（狩人）「やあ〳〵あれえ童子か見えまする、何と仕た者て有ふそ、いや、思ひ出した事かこさるの、此中鬼の稽古をせうと思ふて、此赤頭を拵てをひた程に、是をかふつて是え寄て居さませ、〔かふらせ〕必物を云せうな、〔シテは次第、三人也〕（シテ）「樽呑明けて大江山〳〵、山辺にいさや出ふよ、シテ「是は大江山に住(む)酒呑童子〔しやとも〕てこさる、扨も三年以前に猟人を抱え置た、今日も猪猿を取に遣わしてこさる程に、参て見物致(さ)ふと存る、〔打切〕我山谷を立出て〳〵、足に任せて行程に、峠に早く付にけり、シテ「急く程に峠に付ひた、床几を持てこひ、ヲニ「畏てこさる、〔シテ大小のまえに、正めんむき、せう(き)にこしかける、アト鬼二人左りのさにいる〕扨猟人は何方に居るそ、尋てこひ、（ヲニ）「心得てこさる、カリ(人)「是にをります、（供鬼）「急て出やれ、（狩人）「心得てこさる、（供鬼）「狩人出ましてこさる、（シテ）「何と狩人、何を取つたそ、（狩人）「今日何と致(し)たやら、今朝兎さきの一疋も見当りませぬ、何にても眼さえ掛りましたらは、余す事てはこさ(り)ませす、けんそく衆に仰付られまして、背子を御入成れて下されませひ、（シテ）「其背子とは何の事ちや、（狩人）「山々峯々を背子を入れ狩せらるれは、けた物も鳥類もみな出まする、出る所は何程ても取て上まする、山々峯々より狩出すを背子と申(し)まする、（シテ）「夫は外え云付る迄も無、此童子か山々峯々を白眼廻せは、空をかけるつはさ、地を走るけた物、凡天か下に居る者、

某の位勢に恐れて出る事ちや、〔此時、アト皆々ワキさに並ふ〕出々鳥類白眼出さんとて、〔カケリ、床几はなれてカケリの内に、いろ〳〵山を見る様子、工夫有也、打上て〕（地）「出々鳥類白眼出さんとて、さも恐ろ鋪き眼を開き、白眼廻せは尼はをとろき、よろほひ出れは、あれ見よ現れ出たるそや、〔尼出てよろほひ寄付、狩人も出てつかまえ〕（シテ）「やひ〳〵夫は何者ちや、〔そはへより〕人臭ひ〳〵、去り乍頭は我山の風に似て、形ちは人間ちやか、先己は何者ちや、（狩人）「是(は)私の母者物てこさる、（シテ）「其母か何んと仕て是え出た、（狩人）「去れはてこさ(り)まする、私の是え参た由を承て、何卒鬼に成(り)是え参(り)、共々御奉公か致(し)たひと申て、様々宿願を立て、あの如(く)大形鬼尼に成ました程に、此上は両人とも召遣われて下されう成らは、一入添ふ存ませう、（シテ）「何と云そ、其方か名残を惜み、宿願を掛て鬼比工尼に成て是え来たと云か、（狩人）「中々左様てこさります、（シテ）「何とけんそくとも、子は可愛ゆひ物ちやなあ、召遣ふて取らせうか、（供鬼）「ひ女てこされは、御遣成れても御用には立ますまひ、（尼）「何も申立はこさりませぬか、うしつむき、御小袖のほころひ抔はいか様にも致ます、（シテ）「夫は調宝ちや、召抱ふそ、（尼）「夫は添ふ存まする、（シテ）「扨某の禁物は念仏、其外仏臭ひ事を聞と旬通りきか失る程に、失れても念仏或は後生の事抔を申な、（尼）「心得ました、（シテ）「さあ〳〵此所て酒宴を始めう、〔と云、太こさになをる〕（地）「鬼尼つく〳〵思案を成して〳〵頭も角もかな操捨て、狩人諸共真言のたらにを心にとなえ、持たる珠数をなけ掛れは、をとろきさわき通力失て、皆散り〳〵に失にけり、親子は悦ひ大江の山を亦踏分けて、都えとて社帰りけり、

一、シテ童子　面白武悪、黒タレ厚板、指貫、唐折厚板、霊折、中扇指、腰帯、薩棒

一、アト供鬼二人　面武悪、厚板、はつひ、腰帯、赤熊にても頭巾にても、竹杖つき、

一、アト尼　無地小紋、箔着流し、花のほし、鳴尼面、女帯、手をゝひ珠数、

一、アト狩人　くゝりはかま、羽をりの上に帯、細刀、カマス頭巾、弓矢持出る、

入道具　かわら桶、赤熊の内に角の一本付て、

二人座頭

（アド）「旅寝の床は枕なる〳〵、杖にて事や足りぬらん、是は三河の国矢はきの里近き所に住居致す座頭てこさる、此度思ひ立、伊勢太神宮えと志候、住馴し三河の国を立出て〳〵、早程近く鳴見潟、闇の夜照らす星崎や、上野松坂打過て、伊勢の国にも聞えたる山田

の宿に着けり〳〵、何角兎急く程に、是は早山田の宿とや覧に付ひた、先此所に宿を借ふと存る、爰元に宿はをり無か、宿を借り申ふよ、（亭主）「いや、参宮道者と見えた、宿借(貸)ふと存る、是々道者〳〵衆、宿を借し申ふする、（アド）「夫は近比忝こさる、（亭主）「扨、道行は無く候か、（アド）「中々一人てこさる、盲の事成れは合宿も苦舗ふ御座無程に、何卒借して下され、頼まする、（亭主）「尤て御ちやる、然らは号々御通りめされ、（アド）「心得てこさる、（亭主）「扨、御坊は何国よりの参宮てこさるそ、（アド）「某は三河の国の者てこさる、（亭主）「三河の国の人成らは、爰に物語りのこさる程に、咄して聞かしませう、（アド）「夫は亦いか様な事てこさるそ、物語有つて御聞かせ候え、（亭主）「是は程過し事にて候か、三州の住所、旁の様成しか、当国参宮と打見え、同行迎も無唯一人当所猿渡瀬踏かふりにて、かつはと落ちて空な舗く成玉ふか、年へては候えとも、則、今日の事にて候間、旁も平家を一句御語り有れかしと存るよ、（アド）「念比に御物語り候物哉、左有らは一句語り弔ひ参らせうするにて候、（亭主）「尤にて候、然らは某も聴聞申ふするにて候、（アド）「夫にて御聞候え、（亭主）「心得申候、（アド）「扨は我等の国の人にて候ひけるそや、荒、痛は舗の御事哉、一句語りて無跡を弔ひ申ふする、平家 去程に人界不定電光朝露石の火の、夢まほろしの世の習ひ去り、二三人はたとえ悪業深くとも、成仏そくわひとけ玉え、南無あみたふ〳〵、（シテ）「荒有難の弔ひやな〳〵、無残にやな、我婆婆にては、さもさわやか成し身成れとも、五ちよくの水ににこりける、土路の形ちははつかしや、猶々念仏申玉え、（アド）「不思議やな、かたむく枕の上よりも、猶念仏と申せとは、いか成人にてましますそ、御名を明しをわしませ、（シテ）「今は何をか包へき、我もそなたの国の者、音にも聞し召さる覧、京都か果にて候よ、（アド）「扨は宿の物語りの、月も日も京都坊、さも有らは其時の有様を委舗語り玉へへし、（シテ）「出々去らは語て聞せ申候へし、扨も其比は如月春も半はの事成しに、皆人々の伊勢参宮の物語りを、我浦山舗思ひし故に、同行迎も無、唯一人三河の国を立出て、行程も無伊勢の国山田の宿に着けるか、本より此身は盲の、爰猿渡瀬の深き踏かより、有とは知らて杖を便りにあゆみしか、踏はつし、かつはと落ちないりも知らぬ、どろのそこにづふ々〳〵とそ沈みける、フシ こはそもいか成事そとて〳〵、声を立つれは口えとろ入耳鼻ふさかりとろの底にそ沈みける、シテ 是一重に目くらの杖を失ふか如くなり、常成らぬ曲と仕て、腹悪敷く、能し無き云事、唯弔ひてたひ玉え、シテ 目社くらくとも〳〵、人の弔ひ一蓮の上に乗物、爰は山田、すは猿渡瀬、爰踏かふみはつし、落玉ふな、扨亦浦は伊勢の海の寄る浪の音するは、夕汐も指すやらん、さすかに我も座頭なれ、物語

り始めて御慰を申さん、下 昔失れぬ物語り、をとろえはてゝ心さえ、乱れけるそやはつかしやの、此世に迚も無身成り、御身の命まつとうし、早立帰り我跡を弔ひ玉え、盲のくらき所の燈あしき道橋と頼むへし、去らはよ我は此所に、唯一声を云残す、是此世の形見なれ〳〵、〔左りの水衣の袖をりちきつて、アトえ渡し、杖にては入也〕

猪狸

（アド）「罷出たる者は播磨の国加古の郡小笹の里に住居致す左近の三郎と申者てこさる、毎夜山から何やら出て、田畠を荒し増る、中々大休な獄の業とは見えませぬに依、今晩某の参、見届ふと存る、いか様にも〔と云て道行、脇座に腰を掛て居る所へ、シテ出て、色々の体仕て近寄、時四をかひをとす、拝てひする、猶をとす時、〕（シテ）「猪狸てこさる〔と云〕（アド）「猪狸とは何の事ちや」〔と云時、子細を語る、〕（シテ）「昔山中に、頭拾二角十二有、猪は獅々倒しか、一声鳴けは其声山彦にひゝき、山野の獄ちを恐るゝにより、畜類の司と成、我其猪の位を借り、今畜類の司成により、猪狸と申、（アド）「子細を聞けは尤ちや、狸は腹鼓を打つと云、打て見せひ、（シテ）「打てやさしき物、同ち板家のあられ、窓打雨の音、今の狸の腹鼓、〔爰にて腹つゝみ打也〕（アド）「いかにや狸、能聞けよ、今の腹鼓面白けれは、則、命を助る成り、シテ下「余りに打は夜も明る、名残の鼓打んとて、秘曲をつくして打たりけり、〔此末腹鼓〕打あとうつり、シャキリにて止める、

腹鼓の拍子　一ハ　ハツ　ハハ

祇園詣

次第 旅の衣はやれ果て〳〵、野山のちりと成らん、是は遠国の坊主てこさる、某未都を見物致さぬほとに、此度思立一見の志にて候、道行 住馴し、我家の空は雲井にて〳〵、朝立つ儘の旅労れ、うひ〳〵鋪も行程に、名にのみ聞し松原や、下川原にも着にけり〳〵、急候程に是は早、承及ふ祇園下川原とやらんに着た、扨も〳〵夥敷ひ境内哉、誠に尊ウひ寺は門からと云か誠ちや、号鳥井から神前迄を見渡した所は、扨々深ん〳〵と仕てしゆせうな事ちや、殊に石の玉垣神さひて、燈明の光りに迷ひ(を)照らし、わに口の音にもうしうを失れ、参下向の男女、袖をつらね、くひすを継て花を飾り、流石都ちやそ、某杯か体は紅ひに墨のまちつた如くて飾らねと、一入眼に立用て恐れねと、どうやら肩かすほむ、先神前え参ふ、荒有難や〳〵、誠に此御神と申は、いさなき、いさ冊の第四の王子そさの雄の尊と申て、御利生あらた成御神とは、某の国元ても承り及ふた、亦此堂は天竺(デク)の祇園精舎を写されたと云か、いかさま左右も有せう、其許二人の立寄つたは何事ちや、御神(楽)か始つたあ、是は拝ます

は成まひ、扨も夥鋪ひ人群衆哉、先の衆、下にこされ〳〵、跡のをれか見えぬわひの、押まひ〳〵、ありや〳〵、鼓太鼓を打は、笛を吹く、途拍子御方か鈴振つて舞は〳〵、いや〳〵〔笑〕扨も〳〵面白ひ事哉、いかさま是は神の御納受成さるゝか、尤ちや、是々某にも鈴をいたゝか仕し下され、少と御めんなりませひ、鈴をいたゝき増るそ、諸願成就皆令満足、荒有難や、折角思ひ思ふて参詣仕て、加様に御神楽に合と云事は、神慮に叶ふたと云物ちや、扨、迚の事に小宮を廻ふ、何卒神々の御名を覚、国元えの土産に致う、去り乍唯廻りては覚まひ、謡節て廻う、出々去らは廻らん〳〵、社ろ廻るも面白ろやと、神も岩戸を出玉ひ、衆生を守りをわし増し。天照大神は是かとよ、福徳自在円満の諸持の神、大黒、恵比須も豊かにて、実納まれる弓と矢の袋の口を八幡の愛宕白山、何事も云はしや聞かし見もせまし、猿田彦の尊とかや、実誠女人の歩みもしけきみつくしの、宮井しつかに伏拝む、其手な槌や足な槌、後見殿も有明の月の都に住吉や、寿命は永く白髭や、薬師如来はそさのをの化身と聞も有難や、謡詞 実思ひ出したり、神も仏も御一体、我も仏の弟子なれは、師も我も明一体、今社さとれ同一体、我身も仏なりけり、我社仏なりけり、

一、独狂言　能力、十徳、狂分に下くゝり扇さす、

松山鏡

次第（シテ）「帰る嬉鋪古里の〳〵、恋鋪女子に合ふよ、是は越後の国松の山家に住居仕者てこさる、某訴訟の事有て、永々在京致所に、訴訟思ひの儘に相叶ひ、あまつさえ御暇迄を下されて、是程嬉鋪ひ事はこさらぬ、先急ひて下らう、誠に在京の内、洛中洛外名所旧跡を見物致たか、先何より珍ら鋪ひは東山西山と有て、あちえはそろ〳〵こちえはそろ〳〵と、花を餝た如出立て、老若男女遊山に出らるか、あの衣装杯は某の在所には絵に書たもこさらぬ成れとも、地獄も住家と御暇を下されたれは、一時も早ふ在所え帰りたうこさる、扨、某は何哉土産と存、調宝な物を求めて参た、則、此事てこさる、是は鏡と云物て、某の住所には此鏡杯は聞た事も見た事もこさらぬ、扨、此鏡はめて度ひ物てこさるは、先禁中の御宝物にも、神し宝剣内侍所と申て、則、内侍所とは鏡ちやと申、亦は尺の鏡、真ふすの鏡と申て、忝くも天照太神の御籠是成され、代々御宝ちやと申、惣て神の心は明鏡の如しと云て、号明らかな鏡に向を如く、善悪の影か写るに依、鏡程正直な物は無と有つて、古えは神仏の前に計掛て、凡人の手杯え渡る物ては無つたと申、たとえは九界え出るにも、此鏡を見て顔曲を直し、衣もん杯つくろひ出れは、愛しきようも有、亦、仏とも法とも知らぬ物も、此鏡を見ては、きのふは少年、今日は白髪のをきなと見えて、後世に元付も此鏡の徳也、たと

えはいかつて向えはいかつて写り、えみをふくめはありや〳〵笑は〳〵、扨も〳〵きけんの能顔哉、いか様きけんの能はつちやは、訴訟は思ひの儘に叶ひ、久々て国元えは帰る、きけんの悪しからう様か無、扨第一、此鏡は御若衆や女郎の為には一入調宝ちやは、たとえは美目形ちすくれても情を知らぬ女杯も、此鏡に向ひて日々に紅に鉄奨白粉髪杯をけつり、是ては人か思ひ付ふか、心を掛ふかと思はゝ情の心の出まひ物てもこさらぬ、扨、在所の山の神杯は矢瀬大原の柴売女よりをとつてこされとも、此鏡を見て、扨、此様な顔かと白粉杯を又は付、狐の化けた如くきよろつかは、少は見直うと存て、是程嬉舗ひ事はこさらぬ、いや、何角と云内に是ちや、是の人出さしませ、戻つてをりやるそ、（アド）「聞馴た声ちやか誰ちや知らぬ、（シテ）「のう〳〵今下つてをりやるは、（アド）「のう戻らせられたか、扨々そく才て嬉舗ふこさる、童亦上らせられてから便りの音信も無ふたに依、扨は捨られたか、海川えも身をなけうかと思て発増たか、先は息災て嬉舗こさる、扨、願の事は、（シテ）「をゝ扨、願も思ひの儘に叶て、十分の仕合てをりやる、（アド）「先夫は何より嬉舗ふこさる、（シテ）「是々其方に土産ををませう、（アド）「是は中々、女絵か画て有、（シテ）「をゝ尤ちや、夫は鏡と云物て絵ては無、其方の形か写るのちや、（アド）「のう〳〵腹立や〳〵、都の女を絵に写ひて来ると云事か有物かひやひ〳〵、（シテ）「〔笑〕其方か様な見にくひ顔を三年三月発たりとも都には有まひ、是りや見よ、扇を写せ、扇か見ゆる、某か見ると、ありや身共も見ゆるは、（アド）「のう〳〵腹立や〳〵、其方と女と並ふて居る所か書て有るわひの〳〵、兎角其方をたまつてをく故ちや、腰にくゝり付てをこうとて、えも遣らぬそ、〔と云、太きさえつりを取にゆく〕（シテ）「扨も其様にして割るな、此方えをこせ、（アド）「何んのこちえをこせひ、鏡共にしはつてをこうそ、（シテ）「あゝもう成らぬ、ゆるひて呉ひ〳〵、（アド）「とこえ御行やる、やるまひそ〳〵、

一、シテ常の男　髭かけ、素袍、拝下、細刀、かゝみふところに入る、笠きる事も有、つりを、

一、女　常の通

坊々首

一、アド出は文三に同前、（アド）「扨、此比都に替つた事は無つたか、（シテ）「指て替り増た事もこさらぬか、先は繁昌な事てこさり増る、私も北野え参増たが、一条の辺りと思ふに家の表に見事な菊の花か咲てこさ(り)増た故、花は此方の御すきちやと存増て、一枝所望致て、土産に進ふと存、彼一枝を頭にさし、夫より亦祇園清水え存寄し増たか、三条の向から都女郎の七八人、花を傍つた如

に出立、御端手杯数多つれられて、すらり〳〵と参られ増たか、某を見られて物を云は増た、（アド）「して夫は何と仰られたそ、（シテ）「菊の花に指されて、一首の歌に『都には所も無きか菊の花ほうほ頭に咲そ乱るゝ』仰られ増たに依、頼た人の御内に太郎官者と人にも見知られ増た者か、返事を致さぬは無念なと存、返歌仕増た、（アド）「夫は出かひたか、何と仕たそ、（シテ）「都には所は有か菊の花思ふ頭に咲そ乱るゝ、と致増たれは『扨々田舎者には似合ぬ、汝ら舗ひ者ちや、汝もいさこひ』と連立て参り増た、（アド）「夫はとこ元え往たそ、（シテ）「祇園え向けて参つたれは、祇園の林に幕か打てこさ(り)増た、其中え彼花をかさつた如く、女郎の衆か真赤ひなせんの上ええ、のつしのしと上られて、扨、私にも是え〳〵と申されて、上座に直り増たは、（アド）「夫は合点か行かぬ、汝を上座には直しはせまひかな、（シテ）「て も上座てこさる、（アド）「して亦、そちか居た辺りには何か有つたそ、（シテ）「女郎のこんこうか数多こさり増た、（アド）「夫はくつぬきと云て、下部の居る所ちや、（シテ）「て も上座てこさつた物を、（アド）「また其つれな事を云、夫下座と云はひやひ、（シテ）「先下座ならは下座にも成されませ、扨、御はした衆か見事な提重を持て出られ、私え居えらるゝと存、ひさを立直し待てをり増たれは、私の前をつゝと通つて下座え持て行かれ増た、そこて私もむかと致た故、理りも申さす座をとひと立て帰り増たか、二三丁も参り増ると、跡から御はした共か、いきを切つて走つて参つたか、のくるにと取上けた髪も乱、かちやはた(し)にて追掛増たに依、詫言に来たさうなと存、はて夫程に座を立たかかなしくは、止つてをませうと申たれは、彼四五人の女共か、私に申、『取込とは前の物を帰せ〳〵』と口々に申増た、『けによも無、何を帰せと云ふそ』と申たれは、『爰な者か、女ちやと思ふてあな取るか』申やいなや四五人私に飛掛り増て、私の手取足取、つめり増やらたゝやら、弓手めてから手を取て、ねちまする、余りせつなうこさつたに依、物と申増た、（アド）「何と、（シテ）「尋るは此そうりかと申て、帰し増てこさる、（アド）「何んても無、永咄にせひかつきた、すさりをろ、（シテ）「は、

伊勢物語

（シテ）「罷出たる者は西国方の者てこさるか、年来の望て此度参宮の志にて、是迄登つてこさる、誠にきのふ迄は海上はる〳〵の事乍、先恙無く、是程嬉舗ひ事はこさらぬ、亦、今日より陸路を参らは、心も晴て道はかも行ふと存る、誠に海上の間は風もしつかにこさり、陸地にては天気か能ふて、是程仕合な事はこさらぬ、やあ〳〵是に大きな海か有か、誠に此所は近江の国成れは、承及た湖てこさらう、扨々聞及たよりは見所多ひ気色てこさる、古歌にも汐成らぬ

海と詠れたか、此事てこさらう、〔道行〕誠に近江八景と申も此辺りを申けにこさる、是は大きな橋え出た、是か音に聞た瀬田の長橋てこさらう、槙の板苔むす計成にけり、幾夜へぬ覧瀬多の長橋と詠れたも、此事てこさらう、扨、此如くふら〳〵と仕ては成まひ、先急ふ、誠此様な面白ひ道中はこさらぬ、下向致た衆か亦参りたひ〳〵と申さるゝか尤ちや、いや、うか〳〵と来たか、爰は何にと云所ちやの、いや申々、爰は何んと申所てこさるそ、安野ゝ郡ちや、扨は伊勢の国ちやは、嬉しや〳〵、国元を出る時はいつか参り付ふと存たか、程、伊勢の国え着た、扨、一刻〳〵歩んた故、殊外草伏れた、また日も高さうな、幸是に御堂か有、此縁にしはらく寝むつて参ふ、〔と云、ふたひの中、シテ柱の方をむき寝る〕（出家）「是は此辺りに住居致す斎夢坊と申出家てこさる、今日は旦那衆を御斎を下され、例の永咄しを致て、唯今帰る事てこさる、誠に当年は日並続も能と有つて、何方え斎非時に参つても、とれともに機嫌能て見程嬉舗ひ事はこさらぬ、いや、御堂の縁に何者やら某か好物の昼寝を仕て居る、見れは旅人さうな、扨も〳〵余念無ふ寝たは、是はたわひ無は、扨々是は堪忍か成らぬ、某も少相伴致ふ、〔シテの後ろに、せ中合せねる〕（アド）「罷出たる者は此辺りに住居致者てこさる、今日は志の日柄故、斎坊にを呼、辺り衆えも茶杯進せて、漸唯今仕廻てこさる程に、是から畑けえ見廻ふと存る、誠に世に百姓程閑舗ひ物はこさらぬ、山え見廻わう仕たり、亦畑けえも見廻、隙の有事てはこさらぬ、いや、是に斎夢坊か寝て居らるゝ、是は扨、今朝斎にわせて、今方帰られたか、今独は誰れちやそ見よ、参宮道者そうな、是は旅つかれて寝られたも道理ちやか、此御坊は何て草伏られたか知らぬ、誠に友たち共か申は、此御坊は斎非時の先ても、能寝らるゝ（と）云事て、斎の夢と書て斎夢坊と付けられたと申か、日比は悪口と存たか、此休を見ては誠さうな、少両人共にをとろかしてくれう、やひ〳〵〳〵、やい起きよ〳〵、両人「はあ〳〵、シテ「えひ誰殿、先以今朝は忝ふ社こされ、（アド）「其方は見知らぬ人ちやか、何とて某の名を知つたそ、シテ〔笑〕「今朝斎参て、先程帰りました、何ケ年か此の身、御名染の斎夢坊てこさる、（アド）「何と云はるゝ、是、斎夢坊此方の事てこさる、サイム「やあら爰な者か、つひに近付ても無ひに、能寝て居る物を起し、其上斎夢坊ちや、某かとこに出家ちや、日向の国の者て此度参宮するひのう、（アド）田「是はいかな事、合点の行ぬ事ちや、いやのう、其方か南方斎夢坊ちやとをしやつても、袴を着て髪を結て居やる、（シテ）「とれ〳〵、是は扨、成程心は慥に斎夢坊ちやか、はて不思儀な事の、田「のう、そこの日向の人、其方か日向の人て出家て無とをしやつても、衣を着てあたまを丸めてをちやるよ、（出家）「やあ、とれ〳〵、是はいかな事、心は慥に日向の者ちやか、（アド）「のう〳〵、

両人共に御待やれ、二人共に余念も無ふ能寝て居さしましたを、某の急に起ひたに依、正根か入れ違ふたと見えた、両人「兎角とう成とも仕て、本の如俗は俗、出家は出家と仕て呉さしませ、（アド）「其義成らは両人共に今一寝入さしませ、起し直ひて見よ、シテ「唯今けん俗致ては寺に居られませす、難義に成増程に、兎角頼まする、（出家）「某も妻子かこされは、唯今発心致ては何とも成ませぬ、本の様に仕て呉さしませ、（アド）「さあ〳〵両人共に寝さしませ、〔二人共に、亦ねる〕いか様昔より能寝入たを、けわ鋪ふ起さぬ物ちやと申か、此様な事てこさらう、是は前代未聞の咄てこさる、去乍此度本々え魂か戻れは能こさるか、寝入たか知らぬ、両人共に扨も能寝たは、去らは斎夢坊から起さう、是のう、斎夢坊〳〵、起さしませ〳〵、〔うん〳〵と云て、をきる〕（出家）「えひ、誰殿、今朝は忝ふこさる、（アド）「夫々夫てをりやる、是のう田舎人、日向の人、起さしませ〳〵、〔うんと云て、をきる〕（シテ）「はあ、となたてこさる、私は旅の者て殊外労れまして、是にしはらく休みました、（アド）「扨は両人共に先程の事を覚さしませぬか、両人「何事も覚ませぬ、田「最前両人、今の如伏て居さしましたを、某のけは鋪う起したれは、其方か斎夢坊ちやとをしやる、亦、斎夢坊は日向の人ちやと云わします、余り不審に存、亦、二人共に寝さして起し直したれは、此通てをりやる、（シテ）「扨は存当りました、夢に出家致たと見ました、（出家）「某は夢にけん俗致た（を）見てこさる、（アド）「見に付けても重てから疎卒に昼寝を起さしますな、シテ「某は旅の者て、其旨取て極て都え出る筈てこさる程に、最早行きます、田「急しまさは参てこされ、下向には必々寄られませ、此辺て誰と申者てこさる、余り不思義な縁てこさる程に、三人打寄咄しませうそ、（シテ）「誠に不思義の縁てこさる、しはらく御咄し申たうこされ共、早日も長け増、ウタヒ 去らは暇申さん、両人「あら名残をしやの、シテ「此方も名残惜けれは、あの日に向ふて遥の伊勢え参ける、〔出家嗣は、余り急て国元の土産を失れ玉ふな〕シテ「をゝ夫そうよ〳〵、下向道の土産には〳〵伊勢菅笠や、せん被ひ、鯨物指、貝杓子、背のり、遙菅、笙の笛、買集め取集め、日向の国え帰らん〳〵、三人「さらは〳〵、

一、シテ 狂(言) 上下、菅笠持出る、但し羽帯をりにしても、

一、斎夢坊 角頭巾、着流し衣、

一、田舎人 狂(言)上下にても、長上下にても、